

平成31年度 入学式 式辞

熊本県立大学の前身である熊本女子大学のあった、ここ県立劇場の地において、本日、本学に入学される総勢551名のみなさんを、蒲島郁夫 熊本県知事、森浩二 熊本県議会副議長をはじめ、ご来賓の方々と共に慶びたいと思います。みなさんのなかには高校に入学して早々、熊本地震に見舞われた方もおられることでしょう。あの苦難に耐えたあなたの青春に敬意を表します。

森羅万象、生きとし生けるものには、この世に生を受けた喜びとともに感謝の一生を送ってほしいと思っています。先の見えない暗い闇のなかで生きる不幸を想像すれば、明るい太陽を浴び、風を感じ、清々しい月や星を眺めることのできる日常が大切だと思います。人生が長いか短いか、感じ方は人それぞれですが、どんな人の一生にも節目があります。何かが終わる、何かが始まる。何かを終え、何かを始める。みなさんは何かを終え、何かを始める現在にいます。本学への入学にあたり、自分は何から卒業し、どこに向うのかを考え、決意を新たにしてほしいと思います。昭和の一時代、18歳で歌手デビューし、26歳で亡くなった尾崎豊は「卒業」という歌のなかに「この支配からの卒業」というフレーズを繰り返しています。高校を中退して歌手になった彼の生活は、堅苦しく息苦しく「支配」でしかなかったのでしょうか。早熟で無為な考えのようにも感じますが、人が社会人となる手前で感じる人生への不満、不安は、多くの場合、青春時代の通過儀礼であります。悩むことはあってよい。ただ、漠然と悩んでいても光は見えない。自分を見つめ、心を見つめ、自分の前に広がる世界を見つめて、いま何をすべきか考えましょう。それが節目の行いであり、次へと進むことであります。

明治の文豪・徳富蘆花は「謀叛論」という演説のなかで、若者に対し、人格を陶冶すべきことを呼びかけました。人は自分を磨き続けないと健全な精神を損ねます。人格は、体験と考えること、思考とで磨かれます。みなさんは「考える生活」を過ごしていますか。熊本日日新聞の論壇というコーナーに立命館大学の福間良明氏が、かつては社会に見られた「なぜ学ばなければならないのか」という問いが現代社会では顧みられていないと書いています。「なぜ学ばなければならないのか」。みなさんは、どう思いますか。その答えが世の真理であれば、答えは一つです。しかし、それは人生の課題、すなわち命題であって真理ではなく、一つの答えではありません。人それぞれが自分の人生と向き合って探し求めるべきものです。命題は、答えを得るそのことよりも、むしろ考え続けることが重要です。人の一生にはさまざまな課題や試練があり、ものごとの進捗が順調なときも不調なときもあります。「なぜ学ばなければならないのか」の答えは、自分の現況と深く関わり、時に応じて変化する命題ですが、それをぜひ若者に考えてほしいし、大学生となるみなさんには考え続けてほしい。日常的に考えずとも、どこかの時点で立ち止まって考えることが大切です。それは人生の節目に、いま何をすべきか考えることと恐らく同義です。

まもなく平成という時代が幕を下ろします。グローバル化を推進したこの30年は、科学技術が革命的に進歩する一方、格差社会や異文化対立を見せつける混迷の時代でもありました。スマホが普及し、AIやバイオテクノロジー、ICT、IoTなどが牽引するイノベーションの社会は、豊かで快適な生活を追求しようとする人間の本能から生み出されたもの

ですが、道を誤れば人類の幸福にはつながりません。夏目漱石は、個人主義の末路が秩序の迷走と人心の荒廃であることを示唆しています。個性を尊ぶ元来の個人主義が大義のない利己主義へと変化すれば、人の世は混乱します。平成時代の恩恵である SNS はバーチャルなコミュニティで人々の関係を多様化しましたが、人間とは調子にのるものです。ネットを駆け巡る言いたい放題や犯罪を誘発する書き込みなどが複雑な人間模様をあぶり出しています。世間話や噂話をネットによって白日のもとにさらす情報化社会は、もともと責任が伴わない自由度の高さを持っているそれらに力を与えます。わがままに拡散する無責任な理屈を言論とは呼ばないのですが、それを言論と思ひ込む素地が現代社会にあります。SNS の情報が全てに身勝手ではありませんが、社会の主役がインターネット空間のオピニオンであってはならないと思っています。社会は基本的に健全でなければならない。さらに言えば、社会は包括的であり、多面的かつ重層的でなければなりません。社会を健全に保つには知性が必要です。究極の知性は、真贋を見極め、良し悪しを的確に判断する分析的精神です。ものごとを分析的に捉える目を学生時代に鍛えましょう。いわゆるポピュリズムは媚薬を求める精神性です。私たちにとって望ましい社会は、真贋を揺るがせにせず、感情に支配されず、核心的に普遍的な価値観が存在し、多数の無責任な独り言を力に変えさせず、権力と非権力が常に拮抗している社会であります。そんな社会を、みなさんの知性で築いてくれませんか。漱石は、人間の多くが自分の力を発揮できずに死んでいるだろうと嘆き、だから機会をとらえては自分の力を試すようにと書き残しています。

高村光太郎の有名な詩に「ぼくの前に道はない ぼくの後ろに道は出来る」とあります。私たちの未来は確かに存在し、時の歩みとともに訪れますが、未来とは、実は、たいへん虚ろな、はかない存在であります。未来がどのようなものになるか、いまは分かりませんが、私たちが未来を創る者たちであることは間違いなく、未来のかたちは、ほぼ、いま決まります。よりよい未来を望むのであれば、現在を生きる私たちの意思や行動で、それは決まるのです。私たちの「いま」は、未来を創るものとして極めて重要です。いまをどう生きればよいか、その選択肢は無限と言えますが、よりよい未来のために、みなさんには過去を大切にす精神を忘れないでほしい。人生とは努力の積み重ねです。すべての過去に人々の知恵や創造があり、喜びや苦悩がある。過去とは人類の経験知、経験則の宝庫であります。だから、先人の遺物には敬意を払わなければなりません。過去を疎かにする人類に、よき未来はありません。大学とは、学問の場。学問は、過去を大切にする営みの典型であります。過去を大切にする意味を学問に見出し、知性の豊かさを貴ぶ感性を持ってほしいと、みなさんに願います。

最後に、みなさんの学生生活が心豊かで充実した人間関係に彩られることを祈念し、熊本県立大学がみなさんの未来を育む、輝かしい学びの場であることをここにお伝えし、本日の式辞といたします。

平成 31 年 4 月 8 日

熊本県立大学 学長 半藤英明